

---

# オレンジの君へ

高田高

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

オレンジの君へ

### 【コード】

N2923D

### 【作者名】

高田高

### 【あらすじ】

ARIAファンフィクションです。ARIAを知らないと思われる部分、掴みきれない部分、雰囲気が多いです。

## プロローグ

夕日のオレンジに染まる街“ネオ・ヴェネツィア” 外海へと続く運河、迷路のように入り組んだ水路。水の都と呼ばれる街。

水路を滑る1隻の黒いゴンドラ。身の丈を超えるオールを巧みに扱い、エメラルドグリーンの長い髪を風に遊ばせる。

ふいに聞こえた音色に少女はそちらに向く。遠目からなのでおぼろげにシルエットが見える程度。

「アリスちゃん？」

「あ、すみません」

アリスは気を取り直すと再びオールを優しく掴み、ゴンドラをオレンジ色の水面に滑らせた。

## 数日後

あの日と同じ時間、あの日と同じ場所を今度は石畳の道を、アリスはミドルスクールの制服を身に包み、下宿先へ急いでいた。

あの日と同じ音色が聞こえ、そちらに目を向ける。左肩にバイオ

リンを当て、夕日のオレンジに染まる弦を弓で引き、音色を奏でていた。落ち着いたメロディにしばし時を忘れた。

ふいに演奏が止むと、演奏者とアリスは目が合い動きが止まった。アリスは我に返ると、下を向き通り過ぎようとした。

「僕の音色、どうでした？アリスさん」

アリスは自分の名前を呼ばれた事に驚きに振り返る。銀色の短い髪をなびかせ、中性的な顔立ちの少年は優しく微笑んでいた。

「私の名前…どうして？」

「え？やだなあ、同じクラスの明石ですよ。1週間前にこっちに来たからあまり印象ない、かな？」

あかいし まこと  
明石真。親の仕事の都合で地球から火星に越して来た。アリスはようやくその事を思い出した。

「ところでなぜ、ここで演奏を？」

アリスの質問に真は、眼前に広がる運河を見つめた。

「海が、よく見えるから」

真の言葉にアリスは、不思議そうな表情を浮かべ首を傾げた。

「でっかい意味不明です。火星は水の惑星ですよ？珍しい風景では…」

火星は150年ほど前に行われた、惑星地球化計画テラ・フォーミングにより、当初の予想を超えた極冠部の氷の融解によって9割が海に覆われた水の惑星となった。

そのため、見渡せば必ず海が見える立地条件になる。

アリスの質問に微笑むと、海に沈みはじめた太陽を指差した。

「ここは太陽が沈んでいくのがよく見えるんです」

ゆつくりと火星の海へと沈む太陽。立ち止まったままそれを見つめていたが、

「そろそろ、帰らないと」

アリスは我に振り返りつぶやくと、真に手を振り、帰り道を走って行った。

アリスを見送ると真は再びバイオリンを肩に当て、音色を奏ではじめた。

奏でられる音色はゆつくりと、オレンジの空に溶けていった。

《続く》

## プロローグ（後書き）

作者は音楽に関してまるで知識がありません。もちろんバイオリンも弾いた事もなければ、触った事ありません。なので、そこをツッコまれると厳しいです。その辺は何とぞ、ヨロシク。

オレンジの君へ

## 前編

ウンディーネ

ゴンドラを操り街の名所を案内する水先案内人。

アリスは業界大手の『オレンジぶらねっ』に所属するペア・ウンディーネ。ウンディーネには階級があり、両手袋の見習いをペア、片手袋の半人前をシングル、手袋無しの一人前をプリマと呼ぶ。

アリスの朝は早い。学校開始前に仲良しの先輩と練習をするため。

その日もウンディーネの制服を着込み、練習用の黒いゴンドラを滑らせていた。

運河を通ると聞き慣れた音色が耳に届く。目を向けるとバイオリンを弾く真と目が合い、お互い微笑む。

真は演奏を止め、運河側に突き出た棧橋に向かい、アリスもそちらにゴンドラを寄せた。

「おはよう！今日も早いですね」

「お互い様ですよ」

あの日の出会いから、このお決まりのセリフからはじまる挨拶も本日で1週間になる。これといった話題もないのだが、2人にとつては重要なもの。

「そろそろ行かないと藍華先輩に怒られます」

オレンジの君へ

「うん。じゃ、学校で」

これもお決まりのお別れの挨拶。実際は学校で親しく話しをする事はない。

会話を切り上げる体のいい合図といったところ。

家路につく真を見送るアリスだったが、

「あ、待って！」

アリスは真を呼び止めた。それにたいしてアリス自身が驚いていた。

「どうしたの？」

真の声に我に返り、困ったように視線を逸らした。呼び止めてしまったものの、その理由が自分でもわからず困惑していたが、ある事を思い付いた。

「練習、付き合ってみませんか？」

「良いの？」

「お友達、と言う事なら大丈夫なはずですよ。灯里先輩はよく乗せてますから」

差し出された手を取り、真はゴンドラに乗った。

ゴンドラ内は練習用のためとあって、大人3、4人で一杯といった感じ。オールが水面をかくと、朝の少し冷たい風が肌を撫でなが

ら、ゴンドラはゆっくり進みはじめた。

ゴンドラを操るアリスの姿は普段と違い、どこか凛々しく見えた。それはウンディーネの制服を着ている事もあるのだろう。

白いタイトなワンピースドレス、短めのセーラー、右膝上まであるスリット。学校の制服とはまるで違うその姿に、真は目を奪われた。

「あー…」

真の視線にアリスが困ったように声をかけると、それに気付き顔を赤くさせて目を逸らした。

しばらくの後、老舗観光会社である姫屋の前にたどり着いた。

そこにはアリスと同じ黒いゴンドラに乗る、ウンディーネの制服の少女がいた。

「おっそーい！」

「藍華先輩、紹介します。私のクラスメイトの明石真さんです」

「明石です」

「え？あ、どうも」

藍華は紫色の髪をトップ付近の両脇で三つ編みに垂らしているのが特徴。

制服はデザインこそ同じだが、会社ごとに違った模様が施されており、その模様をオレンジぱらねっとは黄色、姫屋は赤く染色している。

藍華はゴンドラをすうーっと寄せると、アリスに耳打ちした。

(ちょっと、同乗者無しにお客様ませちゃ…)

(でっかい心配いりませんよ。彼は私の友達ですから)

(そんな、灯里じゃあるまいし…)

藍華は真をチラッと横目で見る。それに気づき真はにっこり微笑む。その笑顔にある人物が頭をよぎり、ドキリとさせた。

「藍華先輩、顔、赤いですよ?」

「べ、別にアル君に似てるなあ、とかそんな事…」

思わずその名前を口に出してしまい、藍華は耳まで真っ赤にさせた。それに対し、アリスは『はいはい』と返事をした。

「先に行きますよ?」

「あ、待ってよ後輩ちゃん!」

## オレンジの君へ

石畳の通路から運河側に突き出した場所に、ARIAカンパニーと呼ばれる観光会社はある。

在籍人数わずか2名の小規模な会社ながら、ネオ・ヴェネツィア

では知らない者のいない有名な会社。

「アリスちゃん！藍華ちゃん！」

2人と同じ黒いゴンドラに乗る少女はアリス達を見つけると、手を振りながら2人の名前を呼んでいた。

桜色の短い髪、对象的に両サイドから腰まで伸ばした長い髪が特徴。一部もみあげと呼ぶ者もいる。

「灯里先輩、今日は友達を連れて来ました」

「明石真です」

「水無灯里です」

差し出された灯里の手を、真は照れ臭そうに握った。

「さあて、そんじゃ練習はじめよっか？」

藍華の声にアリスと灯里はうなづいて答え、ゆっくりゴンドラを進ませた。

ゆるやかに揺れるゴンドラと、肌を撫でる朝の風は心地良く、しばし時の流れを忘れさせた。

《続く》

## 後編

あの日の夕日

あの日の海

あの日の彼女

一つ一つ思い出しながら彼女のための音色を、頭に思い浮かべる。  
それを実際に音色にし、いつもの場所でバイオリンを弾く。

今日は楽しそう

今日は練習は休み

今日は機嫌が悪そう

彼女を見ながらバイオリンを弾くうちに、気付いたこの気持ち。

君に伝えたい

オレンジの君へ

授業が終わり、生徒達が部活や帰宅のため教室を去って行くなか、

真は机に頬杖をつき、すやすやと眠っていた。  
アリスは真の肩を揺らすと、それに目を覚まし真はしばし宙を見つめた。

「明石さん？授業終わりましたよ？」

その言葉に反応すると鞆を持ち、勢いよく席を立った。

「それじゃあ、また明日」

「あ、ちょっと待って！」

教室から出ようと歩き出したアリスを真が呼び止めると、その声に立ち止まり振り返った。

「午後の練習、付いて行っていいかな？」

「良いですよ。さ、そうと決まったら急ぎましょう」

太陽が街を淡くオレンジに染めはじめた頃、朝と同じメンバーが揃い、練習を開始していた。

「よし、交代！次、後輩ちゃんねー」

「はい。今日はでっかい本気でいきますー！」

高らかに宣言すると握り拳をつくり、オールを持った。

「おお、後輩ちゃんが燃えている！」

「アリスちゃん、頑張れ！」

本気を出す！と言っても慣れた練習ルートのため、これと云って見せつけるところもないわけだが。

進み出したゴンドラは、運河から細い水路へと入って行く。迷路のようなそこを巧みにオールをさばき、難無くクリアしていく。灯里と藍華はいつもの事のため落ち着いたものだが、真は踊るようなオールさばきに感嘆した。

「朝の練習でも思いましたけど、オールさばきは3人の中では一番……」

真は藍華の睨みつける視線に気付き、とっさに口を閉じた。

「ふん、すぐに追い抜くからいいわよ！勝ち誇っていられるのも今のうちなんだからね！」

藍華はビシツとアリスを指差し挑発するが、それにアリスはふんつと鼻で笑い余裕を見せつけた。

「藍華先輩が追い付く頃には、私はプリマ・ウンディーネになっていますから。残念でしたね」

「ぬなっ!?!」

アリスと藍華がむむむつとうなりながら睨み合い、灯里がそれをなだめていた。それを見ていた真はクスリと笑みをこぼした。それに気付कि、藍華は真を睨みつける。

「あによ!？」

藍華の迫力に押され、真はたじろぎ、それを灯里が『藍華ちゃん、どうどう』と、馬や牛でもなだめるように落ち着かせた。

「あ、あの……僕は親の仕事の関係で転校してばかりだったから、皆さんのような関係がうらやましくって……」

「そっか……。それじゃあ……はい！」

藍華は白と緑のストライプリボンを小物入れから取り出し、真に差し出した。アリスは、そのリボンに見覚えがあった。

いつだったか、髪をまとめるためのお気に入りのリボンを無くしてしまった時、藍華が渡したりボン。

その後、お気に入りのリボンが無事見つかり、藍華に返したものの。

「後輩ちゃんの使ってたリボン。今日の記念と後輩ちゃんとの友情の証！」

リボンを受け取ると、バイオリンケースから弓を取り出し、持ち手部分に縛り付けた。

「白と緑のストライプが2人を表してるみたいで、なんだか素敵い」

「恥ずかしい表現禁止！」

「ええー！？そんな事ないよお。ね、アリスちゃん？」

灯里の言葉にアリスは頬を少し赤くさせた。

「いえ、でっかい恥ずかしいです」

真は3人のやり取りを微笑みながら見つめていた。

夕日を背景にしたその光景を目にした時、何かを思い付いたのかバイオリンを弾きはじめた。

流れ出した音色に3人は静まり、その音に聞き入った。

落ち着いた音色が奏でるその曲は、通り過ぎる人やゴンドラがつかい止まって聞いてしまうほど。

演奏終了とともに、辺りから拍手が鳴り響いた。

それに対し4人は適当に挨拶すると、急いでその場を離れた。

「あー、驚いた。…にしても良い曲だったわねえ。感動しちゃった」

「うん！すごく素敵な曲！なんて言う曲ですか？」

「でっかい気になりますね」

その質問に、真はアリスを見つめて答えた。

「黄昏の姫君、なんてどうですか？」

「黄昏の、」

「姫君？」

「それって…」

灯里と藍華は、同時にアリスに向く。その視線に訳がわからないと言った感じで、アリスは首を傾げていた。

1週間後、真は思いを秘めたまま、地球の学校に転校して行った。

それから、季節が巡り

プリマ・ウンディーネとなったアリスのもとに、封筒に入れられたりサイタルチケットが送られて来た。差し出し人の名前は無かったが、チケットを見ると自然と笑みがこぼれた。

白と緑のストライプ柄のチケット。

そこには一言、添えられていた。

オレンジの君へ

オレンジの君へ

オレンジの君へ

完

## 後編（後書き）

短い連載でしたので、短編にしちゃえばいいんじゃない？と思われそうですが、ネタを絞るのに時間がかかったのでこうなりました。

作中ラストのチケットに書かれた一言はそのまま題名になっていますよ、って事だったんですが。わかりましたかね？わかりにくかったかなあ。

もう一つ、白と緑のストライプ柄は、真とアリスの髪の色にかけてあるんですが、これもわかりにくいかなあ。

最後に、「オレンジの君へ、この曲を送る」みたいな言葉が繋がるわけですが、そこは皆さんの想像にお任せします。

呼んでやって下さい。

それでは、この次ありましたら、また

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2923d/>

---

オレンジの君へ

2009年3月24日09時52分発行